

国際シンポジウム

犯罪、学校、暴力—そして再生

——米国コロンバイン高校事件と付属池田小学校事件の
遺族と支援者による共同発言——

2005 年 10 月 9 日（日）

大阪国際会議場（グランキューブ大阪）

後援：日本社会福祉士会・日本臨床心理士会・全国国立大学付属学校 PTA
連合会・全国犯罪被害者の会（あすの会）・全国被害者支援ネットワ
ーク（五十音順）

〈パネリスト報告〉

ドーン・アナ（Dawn Anna）（コロンバイン高校事件遺族）

ブルース・ベック（Bruce Beck）（コロンバイン高校事件遺族）

酒井 肇（付属池田小学校事件遺族）

酒井 知恵（付属池田小学校事件遺族）

〈指定発言者〉

諸澤 英道（常磐大学理事長・「全国犯罪被害者の会」顧問）

〈司会・コーディネーター〉

池埜 聡（関西学院大学社会学部助教授）

国際シンポジウム「犯罪、学校、暴力そして再生」報告

回復への道程と支援のあり方

——「知る」、「参加する」、そして「達成する」——

高藤 三千代*

キーワード：回復への道程、学校安全、コミュニケーション、人権、犯罪被害者支援

2005年10月9日（日）、大阪国際会議場（グランキューブ大阪）において、本COEの2005年度第2回国際シンポジウム「犯罪、学校、暴力——そして再生：米国コロンバイン高校事件¹⁾と付属池田小学校事件²⁾の遺族と支援者による共同発言」が開催された。コロンバイン高校乱射事件の遺族ドーン・アナさん、ブルース・ベックさん夫妻による基調講演の後、付属池田小学校事件の遺族である酒井肇さん、智恵さん夫妻の報告、全員によるパネルディスカッションが行われた。ご招待者67名、一般からは約180名の参加があった（本COE関係者、報道関係者を除く）。

2004年12月、日本において、犯罪被害者の人権擁護と心理・社会的支援の拡充を明記した最初の法整備「犯罪被害者等基本法」が成立したが、具体的な支援システムの構築が、今後、検討されなければならない状況である。本シンポジウムは、日米両国において学校の安全を脅かした両事件の被害者遺族が席を共にし、突然、犯罪被害者にされてしまった苦悩と軋轢そして再生への経験を、シンポジウム参加者と共有することにより、支援のあり方を共に考えていくことを目的とした。当日は参加型シンポジウムを目指し、アナライザーシステムが導入され、会場全体の声を一部反映させてのパネルディスカッションとなった。

シンポジウム冒頭、司会・コーディネーターの池埜助教授より、犯罪被害

*関西学院大学

者が人間としての「尊厳」と「権利」を取り戻し「回復への道程」を歩むなかで、三つの段階、「知る」、「参加する」、「達成する」ことが重要な鍵となること、そしてこの三つの段階を支えるのに犯罪被害者と支援者のコミュニケーションのあり方がいかに大きな要因となるかということが指摘された。基調講演で語られたドーン・アナさん、ブルース・ベックさん夫妻の経験、そして続いての酒井夫妻の報告は、まさにこれらのことを如実に示していた。

1999年4月20日、米国コロラド州コロンバイン高校で卒業式を間近にひかえた娘のローレンさん（当時18歳）が、図書館で勉強中に犯人たちの凶弾に倒れ死亡した。ドーン・アナさん、ブルース・ベックさん夫妻は、ローレンさんの死後25時間後にしてようやく彼女の殺害を、皮肉にもテレビの報道を通じ確認することとなった。事件発生直後からの学校関係者・警察による事件に関する情報の操作、一部しか明かされない真実、偽りの証言は、事件から6年半たった今も続いている。夫妻は娘を突然失った悲しみ、事件の真相究明への奮闘、惨劇の場と化してしまった図書館改築へ向けての取り組み、被害者遺族との連帯、公的援助を拒否されたなかでの改築費募金活動、改築実現の経緯について語り、これらの取り組みが癒しの過程であったことを伝えた。そして事件を「忌まわしいこと」、「悪夢」などとして葬りさってしまうのではなく、残された者たちが事件のことを記憶し、亡くなった者たちを追悼することが大切だと強調した。

第二部では、今回のシンポジウム開催のきっかけとなった酒井肇さん、智恵さん夫妻の4年前のコロンバイン高校訪問、惨劇の場となった両校の校舎の改築と再生の様子を伝えるビデオ上映の後、酒井夫妻の報告、そして全員でのパネルディスカッションとなった。酒井夫妻の報告では肇さんが、「起きた事件や、子どもたちの死は遺族だけのものではなく、それを知るすべての人々が、それをどのように受け止め、何をするかによって、その意味は違ってくるのだと思う」と訴え、自らの経験と活動を紹介した。妻の智恵さん

は、麻希ちゃん（当時7歳）殺害の真相究明に、学校と警察側からの十分な情報開示がなく困難を極めたこと、そこで感じられた強い疎外感と苦しみ、自らの再生と希望そのものとなった校舎改築に至るまでの経緯、そのなかでのコロンバイン高校被害者遺族との出会いについて伝えた。続くパネルディスカッションでは、ドーン・アナさんから両事件の被害者遺族の直面した問題と障害が類似していること、「暴力に国境はない」ことが指摘されたが、以下、その類似点、特に遺族たちが「知る権利」を奪われたこと、「知る権利」は遺族たちにとって切実な問題だったことに着目し、パネルディスカッションで浮かび上がってきた「学校の安全」と「被害者支援」の重要な結びつきについて、そしてその支援のあり方について述べる。

両事件の遺族たちは事件発生当時、子供の安否を学校と警察からは確認できなかった、そして事件発生から子供たちが死に至るまでの学校関係者と警察の対応と責任については、未だに十分な事実確認がなされていない。指定発言者の諸澤氏は、メディアを通じて被害者がまず知るということは決してあってはならないと訴え、捜索情報の開示が今後取り組まれるべき課題であることを強調した。真実を知ることが遺族にとってなによりも重要なことである。ドーン・アナさん、ブルース・ベックさん夫妻は、娘のローレンさんの死亡を、当初、犯罪被害者支援員から知らされなかったことについて、自分たちを思いやったのことだったかもしれないが、しかし逆に心の痛みをより大きなものとしたと述べた。酒井夫妻は、なぜあの事件は起きたのか、どういう措置がされたから、あるいはされなかったからあの事件は起きたのか、二度とあのような事件を起こさないために事実を知りたい、と訴える。事件の事実認識を欠いては事件再発防止の処置はできない。被害者遺族の思いに寄り添い支援することと、学校安全の確立には深いつながりがあるといえよう。

しかしその支援は、遺族の知る権利を支えることだけではない。そのあり方は多様である。ドーン・アナさんが経験したような、友人による寄り添い

と苦しみの共有、酒井智恵さんが経験したような、日常の生活で必要なときそっと差し伸べられる友人からの支えでもある。すなわち被害者遺族の主体性を支える行為である。支援はまた学びの過程でもある。酒井夫妻の弁護士を勤めた垣添氏（シンポジウム・ご招待者）は、夫妻の同じ目線、速度で歩んでもらいたいという思いに寄り添い、試行錯誤しながら支援のなんたるかを学ばせてもらったと述べる。遺族が主体的に参加するのを支援していくことが弁護士に課された課題だと。氏は「犯罪被害者等基本法」の成立に言及し、今後、日本法律センターから無償の弁護士派遣制度が導入されようとしているが、被害者支援に精通している弁護士はごく少数であるため、基盤をどのようにつくっていくかが課題であることを伝えた。また支援に学びは往々にして必要であることを、我々は心にとめておく必要がある。地下鉄サリン事件の遺族である高橋さん（ご招待者）は、アナライザーシステムで会場の約半数が「支援者」とは「心のケア」をするのだと考えている結果が出たことに対し、事件から10年たってもそのニーズはまったく埋められていないことを強調し、会場参加者の認識を新たにした。

以上、本シンポジウムでは、支援には、人と人とのかわり合いとそのあり方（コミュニケーション）が重要な役割を果たすこと、そしてそのことが犯罪防止と学校安全の構築につながるということが確認されたといえよう。そして、犯罪被害者の回復の過程とは、実は社会の回復の過程でもあるという事実が垣間見られたといえよう。すなわち、犯罪被害者支援とは、犯罪・暴力を生み出してしまっている社会の回復への道程を、支援者も共に歩んでいくことを意味する。このことは、つまり「人類の幸福」構築へむけての道程を、犯罪被害者と支援者が共に歩んでいくことである。

最後に、今後の犯罪被害者支援システムの構築の課題として、以下のことに言及したい。シンポジウムでは、長井氏（常磐大学：ご招待者）によって、人間社会は運命共同体であること、そしていつ誰が被害にあっても何が起こっても、国も他者も信じられる社会の構築が必要とされていることが指

摘されたが、具体的なシステム構築を検討するにあたっては、なによりもまず被害者の思い・ニーズを受けとめることが大切であることを明記したい。

注

- 1) 1999年4月20日、アメリカ・コロラド州デンバー郊外のコロンバイン高校に、二人の在校生が自ら「トレンチコート・マフィア」と称し、校内で銃を乱射。12名の生徒と1名の教員が犠牲となった。犯人は犯行直後に自殺した。
- 2) 2001年6月8日、大阪教育大学付属池田小学校に暴漢が侵入し、包丁によって8名の児童（1年生1名、2年生7名）が殺害され、13名の児童と2名の教員が負傷した。犯人は裁判で死刑が確定し、2004年に執行された。